「化け込み記者」下山京子再考

－初期『大阪時事新報』の紙面から－

松尾　理也

１．はじめに―明治末期大阪の「化け込み記者」

明治末期日本の女性ジャーナリストの草分けの一人に、下山京子という記者がいた。評価は高くない。むしろ批判の対象となることがほとんどであった。批判は主に彼女の生き方へ向けられている。下山は美貌で知られ、かつ、「化け込み」という変装潜入取材手法のパイオニアでもあった。絶えず浮き名を流し、自著で自ら記者時代から有力者の愛人であったことを認めている。記者を辞めてからは茶屋を経営し、また女優に転身して話題を集めた。下山の生き方への倫理的な疑問は、女性ジャーナリストの系譜における彼女の評価を低いものにしている[1]。

ただ、生き方をめぐる批判とは別に、女性ジャーナリストの草分けとしての下山の業績は、改めて検討されてしかるべきだと考える。男性に独占されてきた職場に初めて女性が飛び込んだことによって当時の新聞ジャーナリズムにどのような変化が生まれたかは、倫理的な規範に基づく批判とは別に論じられてよい。本稿は、これまで生き方や倫理といった側面から主に論じられてきた下山について、彼女が記者としての歩みを始めた新聞社である『大阪時事新報』をめぐる構造的要因をもとに、新しい角度からその業績の再考を試みるものである。

1908（明治 41）年 11 月 1 日、大阪で当時の『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』の独占に挑戦すべく創刊されたばかりの『大阪時事新報』が、夕刊発刊を機に「記者探偵」というシリーズを立ち上げた。記者が身分を隠して社会のさまざまな空間に入り込み、見たまま聞いたままをルポするという趣向であり、下山はそのチームの一人であった[2]。

「探偵」は複数の記者によって実行されたが、中でも下山による潜入ルポは、その大胆さに加え、女性という話題性も手伝って当時大きな注目を集め、「化け込み記者」という言葉を流行させるきっかけともなった。

興味深いのは、「なんのために」という問いがすでに出現していることだ。連載開始にあたって、担当記者は前置きする。「部員数名を以て記者探偵活動隊なるものを組織した。有らゆる社会各方面の裏表を探偵して我読者に興味ある報告を提供しやうとするのである。その何の為に探偵するか、管々しくもそんな説明を聞こうとするような野暮の人はおそらく我読者にはあるまいと信ずる、我々もまた隊員の報告が読者をして快哉を叫ばしむるに足ればそれで満足するのである」[3]。潜入ルポはたしかに面白いが、かといって権力を批判するわけでも、社会正義の実現に寄与するわけでもない。この記事だけでなく、後述するように下山の「化け込み」記事もまた、「なんのために」記事を書くのかという自問と説明で始まる。なぜか。下山たちはこれ

まで自明とされてきた記事のかたちとは異なる、新しい分野を開拓しようとしていたからこそ、自らの意味を問い直さざるをえなかったのだと考えるのが自然である。

本稿は、この「化け込み記者」下山の再評価を通して、下山たちの営みが大阪におけるジャーナリズムの形成・変容にどのような影響を及ぼしたかを考察する。

そもそも内川芳美のいうように、近代以降の新聞から「営利性」と「社会政治的機能」を別個の要素として取り出し、その矛盾を論じるのは適当ではない。営利性すなわち娯楽的な性格は、社会政治的機能すなわち啓蒙的な性格と「密接に結びつき、本質的にはそのような社会的効用の基礎の上に立っている」[4]。とすればむしろ、ひとつのメディアの中に娯楽的性格と啓蒙的性格とが必然的に同居する構造こそが問われなければならない[5]。「何の為に探偵するか、管々しくもそんな説明を聞こうとするような野暮の人はおそらく我読者にはあるまい」と、弁明じみた前置きをせざるを得なかった明治末期の記者たちの立場や心情を解きほぐしてみることは、近代化の中でジャーナリズムが果たした役割を新しい角度からとらえ直してみることにもつながるだろう。

２．先行研究と背景

２−１　女性記者の系譜と下山京子

日露戦争ごろから、東京あるいは大阪の有力な新聞社に女性記者が少数ながら採用されるようになった。読者層拡大にともなう、女性読者を対象とする家庭欄などの新設が背景にあった。

女性記者第一号には諸説あるが、江刺昭子は 1889（明治 22）年に『国民新聞』に採用された竹越竹代を嚆矢とする説をとっており[6]、春原昭彦もそれを踏襲している[7]。ただし、竹越の記事は初期こそ頻繁に登場していたもののじきに途絶えがちになり、竹越自身 1895（明治 28）年に『国民新聞』を退社してしまう[8]。その後しばらくして 1899（明治 32）年に松岡（のち羽仁）もと子が『報知新聞』に校正係として入社し、のち記者としても活躍した。松岡はその後、雑誌『婦人之友』を創刊し、また自由学園を創設した教育者としても名を残した[9]。

竹越、松岡をはじめ、明治 3−40 年代に東京の新聞社に入った主な女性記者には、『時事新報』に大沢豊子、下山京子、『毎日新聞（『横浜毎日新聞』の後身）』に松本英子、「万朝報」には川越照子、服部桂子、『毎日電報』に菅野すが、『報知新聞』に磯村春子らがいる[10]。このうち、本稿で取り上げる下山京子については、東京の『時事新報』に大沢豊子とともに在籍したのは事実であるが、新聞記者として最初に採用されたのは『大阪時事新報』である。

女性記者はおもに訪問記事を担当するものとされていた。同時期に『中央新聞』の記者を務めた中平文子が採用の際、どんな仕事をするのか尋ねた際の回想が残っている。「主に訪問です。名流の夫人や令嬢を訪ねて、其の訪問記を書くのですがね、楽なやうでなかなか骨の折れる仕事ですから、あなたのやうなお嬢さんで出来るかどうか疑問ですね、それともどうです、勇気を起こして遣つてみますか」[11]。現代のように電話やメールでアポをとることができるわけではない。いわば「突撃取材」に近く、決して気楽なものではなかった。

下山は 1906（明治 39）年 3 月に『大阪時事新報』に入社し、記者としての活動を始める。まずみておきたいのは、当時も今も変わらぬ下山への厳しい評価である。『東京朝日新聞』の名物記者、松崎天民は「移り気な、自分の運命を弄んだり虐げたりして、『恋』に生くべき女の身を、

『名』に生き様として居る処に、『下山京子』の新しさと、浅間しさと、我儘と捨ばちとが窺われる」「自分の真面目なるべき生活を破壊してまでも、自分の趣味性と道楽気とを、楽しませ様とし満足させようとして居る、世にも憐れなる『変り者』である」[12]と手厳しい。

こうした見方は、現代になってもさほどかわらない。江刺は「『女ならではできぬ大胆な道を開拓した』と美人のせいもあってもてはやされたが、こんな記事は一時の読者の興味はつないでも、やがて飽きられる」[13]と切り捨てている。

下山は新聞記者を辞めたあと、数冊の自著をものしているが、その中で展開される考え方についても、フェミニズムの立場から厳しい批判が寄せられている。同時期に社会を揺るがした平塚雷鳥らの『青鞜』と比較しながら、「下山京子の言説が『青鞜』の告白体の小説と最も異なるのは、既成のモラルから見て女の理想の生き方とされる軌道から逸れた場合、それが自分の選択によるものであっても、既成のモラルの基準から美徳とされる側面をなんとかしてみつけ、それによって自分の行為を正当化しようという傾向が見られることである」[14]とする小林裕子の批判は、代表的な例だろう。

ただし、「既成のモラル」から抜け出せていないようにみえる下山の行動もまた、時代の制約の中で真摯に自らを追い求めた結果であると弁護することも可能である。小林自身、別の場所で「『運命を開拓して、好きな生活に生涯を送る』ことにより、他の女性とは異なる体験や見聞を得ることこそ、真の幸福への道であるというメッセージが力強く語られて」[15]いると、下山に肯定的なまなざしを寄せてもいるのである。

もうひとつ留意すべき点は、下山に対する批判のほとんどが、彼女の著した本をもとにした批判であることである。後述するように、下山は新聞記者を辞めてから職を転々とし、金銭的に困窮しながら名声を追い続けた。その中で書かれた著書はそもそも「売れ線」を狙った著作であり、どうしても下世話な興味に迎合しがちである。他の資料がほとんどない状況では、虚実とりまぜた筆致がそのまま事実として解釈されていくきらいがないともいえない。

日常語で「私」が「私」のことを語る口語自叙体小説は、女の思い出話、または男の恋愛の打明話にふさわしい表現形式、つまりマージナルな、「私の小さな物語」にふさわしい表現形式として明治 20 年前後に登場したとされる[16]。下山の著書からうかがえる自己憐憫や自己韜晦はまさしく、社会の周辺部に位置することを強いられていた女性たちによるマージナルな「私の物語」たる＜女の私語り＞といえるが、ではそれを単なる日記や、誰にも知られない手慰みに終わらせない意思、いわば文芸的公共性への志向はどこからやってくるのか。もちろん＜目立ちたがり＞で＜とびきり見栄坊＞という下山の個人的性向が根底にあることはまちがいないが、本稿ではさらに、実際に下山が活動した新聞という場、新聞記者という仕事が無視できぬ作用を及ぼしたのではないかと考えたい。

そうした観点から、本稿では新聞記者時代の下山を知る「一次資料」として、『大阪時事』の記事を用いる。『大阪時事』での下山の記事については、現在国立国会図書館でのマイクロフィルム閲覧によるしかないというアクセスのしにくさもあって、これを用いた先行研究は見当たらない。本稿は、内的要因としての「性格」「信条」以外に、下山にそういった記事を書かせた外的要因としての「構造」「環境」「状況」にまで踏み込むという点で、意義を持つと考える。

2−2　明治末期の新聞界と大阪

明治末期の新聞界を、とりわけ「軟派記事」や「読み物」の分野から見ようとするならば、「雑報」「三面記事」というカテゴリ分けについてまず整理しておく必要がある。

日本国語大辞典によれば、「雑報」とは「新聞などの社会面の種々の記事。また、雑多なできごとをまとめた報告」である。大新聞の「政論本位」に対して小新聞は「雑報本位」で発展した。雑報は紙面建ての中に配置される面から「三面記事」と呼ばれるようになった。ただし、そもそも分類以前に「なにをニュースとするか」とのフレーム自体が社会的に構築されたものであることに注意する必要があろう。明治初期の「雑報」は、江戸の戯作の流れを汲む艶だね、あるいは花柳界のスキャンダルを中心とする軟派記事であり、そこに社会的批判や風刺が込められることはなかった[17]。小新聞に流れ込んだ戯作者層は自らの生き残りをかけて民衆強化の先兵としての役割を務め、その過程でわかりやすい勧善懲悪イデオロギーが広まっていった[18]。それは「国家の良民」という読者共同体の萌芽でもあった[19]が、しかし、新聞読者層が拡大し記事がカバーする社会の範囲が広がっていくにつれ、より社会的視野をもった三面記事の形成こそが大きな課題となっていった。明治20年代の「三面記事」を経て大正期までに「人間的興味」に基づく雑報＝社会面記事が登場する[20]。

見方を変えれば、それは大新聞と小新聞が統合されていく中で「硬派が上位、三面記事は下位」との序列に再編されていく過程でもあった。土屋礼子はそれを、小新聞に芽生えていたサロン的文芸性が国民型大衆紙へ飲み込まれていく過程ととらえている。さらにいえば、サロン的文芸性が強く現れたのは江戸の戯作の伝統を残す東京の新聞界であり、戯作の伝統が薄かった大阪ではむしろ、「続き物」「事実報道」などの新しい小新聞的要素が強調され、それが朝毎の覇権につながったという[21]。

こうした「雑報＝三面記事」の変容は、いわば旧来別個のものであった娯楽的性格＝面白さと、啓蒙的性格＝ニュース性とが融合していくという過程であったため、強い反発を招いた。また、娯楽的性格と啓蒙的性格が近代メディアにおいては一体であるという認識もなかった時代においては、批判は容易でもあったのである。当時の代表的な論調としては、次のようなものがある。「現今の三面記事は一般非常に軽視せられたる傾がなからうか。知恵浅き品性下劣の三文記者が多く担任しておつたのではなからうか。即ち未だ這入りたての経験の少ない、世情を知らないほや／＼の記者が多く此の方に回さるゝのではなからうか（中略）少しく明あるものは三面記事を読まない」[22]「新聞の三面記事はいうまでもなく、日々社会に生ずる諸般の出来事を忠実に報告するの役目を勤むるものに相違ない。処が近頃の所謂三面記事なるものは決してさうではない。只々読者を面白がらせるのが其目的でウソであらうがあるまいが一向にお構ひなしと云ふ風である。誠に困つた事である」[23]。

こうした批判に白旗を挙げるかたちで、当時の『大阪時事新報』主筆の高見龜（ひさし）は三面記事の取扱方針について、他の有力紙と足並みをそろえ「所謂清新なる家庭の伴侶となり、不知不識（しらずしらず）の間に社会の知識を向上せしめ、見聞を広からしめんことを欲す」[24]と萎縮せざるをえなかった。下山らによる記事は、まさしくこうした規範論が紙面を覆う直前、三面記事の再編成に自由なアイデアが注ぎ込まれていた時期に輝きを放ったのである。

３．創刊直後の大阪時事新報と婦人記者下山京子

３−１　下山京子の生い立ち

下山京子は 1891（明治 24）年、東京生まれと推定される[25]。12 歳で愛住女学校に入学。文芸に興味を示し、16 歳で当時の川柳作家阪井久良伎に師事したところ才を示し、『毎日電報』川柳欄の選者まで務めるようになったという[26]。その後、大阪にいた兄を頼る形で西下し、18 歳で大阪時事新報社に入社した。

虚実入り交じった＜私語り＞ともいえる自伝的小説『一葉草紙』によれば、入社時の下山は「世の中に立つて闘ふのだ」と高揚していた半面、心細さに押しつぶされそうでもあったという。「高見さんといふ大阪の社長に紹介されて、丁度其時東京から来て居られた、社長福澤捨次郎さんに引き合はされました。『兎も角もやつてご覧なさい、あんまり若い娘さんだが』と、社長は私の町風の髪の結ひようや、長い袖の更紗縮緬の着物を着た格好を、面白さうに笑つて見て居られました。そして、言葉少なく、家の模様や、記者にならうと決心した理由なぞを尋ねられるうち、私はなんともしれぬ心強さと、しみ〴〵人の心のうれしさを、この日はじめて覚えた様な気がして、思わずはら／＼とうれし泣きに泣いて了ひました」[27]。

前述の通り、女性記者はたいがい訪問記事を書くものと決まっていたが、自らの筆に自信とこだわりがあった下山は積極的にさまざまな仕事に飛び込んでいったようだ。「大阪時代の私は外国人の訪問だけはする資格がありませんでしたが、その他は何によらず自分の思ふまゝに筆を走らせました。（中略）一日に卒（い）ざ六十行なり七十行なり原稿を作るとなると、私なぞは殆ど、起きるから寝るまで、自分の職業を忘れている時間は一分もありませんでした」[28]。

入社後、下山が書いた記事を特定するのは難しい。この時代の記事には署名がないか、あっても号や「婦人記者」などの職名で示されている場合が多く、だれが書いたかを特定するのは簡単ではない。1906（明治 39）年 8 月 25 日付 1 面に婦人団体「浪華婦人会」割烹実習の写真記事が掲載され、割烹着姿の「下山きよう子」が写っている。これに関連する割烹実習の記事は下山の手になるものと推測できるが、単なる聞き書きであり、主張も個性もない。

ただ、入社早々の下山に原稿執筆の機会は少なからずあっただろう。1906（明治 39）年 7 月 27 日付『大阪時事』は「大発展／八頁に増加す」との社告を出している。厳しい販売競争は内容の充実を求める増ページへの圧力となっていた。「時事新報の分身同体」[29]として、世評の高い『時事新報』の紙面を大阪に持ってくれば事足りるという当初のもくろみは通用せず、自前の記事で紙面を埋める必要に迫られていたのである。

３−２　「化け込み」第一弾―「中京の家庭」

充実した記者生活ながら、社会を揺るがすような派手さとは無縁だった下山が、周囲を驚かせる挙に出たのは、入社から 1 年半ばかり経った 1907（明治 40）年 10 月 18 日付から始まった連載「婦人行商日記　中京（なごや）の家庭」である。下山の豹変ぶりを、当時の女性記者事情に詳しい松崎天民は、「十八歳の春三月、大阪時事新報に入ってより、訪問や家庭記事では平凡なりとて、身を小間物行商の女に扮し、名古屋市の紳士紳商の間に出没すること十余日、中京の家庭と題する四十回余の続き物にまず婦人記者の記録を破った」と描いている[30]。

きっかけは、「フランスのある雑誌に、婦人記者の花売りに仮装した面白い記事がある」とい

う話をある人から聞いたことだったという。

「私に一度、此の変装といふものをさして下さい」。私は或日編集長の高見さんにかう云ひました。「それはまだ日本では、それぞということをしたものもないから、面白いかもしれませんね」と、云ふので、私は俄かに旅立の用意をして、名古屋に小間物行商にゆく事になりました。それは私が入社した年の秋で、十八の年でした。飛行船に乗つて見たらという人もあり、「尾行者をつけて、世界を一人で旅行したらどうだらう」と、福澤さんまでが此時は言葉を入れました[31]。

入社した年の秋という記述を信じるなら、変装潜入取材、すなわち「化け込み」を敢行したのは 1906（明治 39）年の秋だったことになるが、連載は 1907 年 10 月に始まっており、正確には入社翌年の秋ということであろう。ともかく、このやりとりで目を引くのは、社長の福澤捨次郎が登場していることである。しかも名古屋での化け込みなどというスケールをはるかに超えて、飛行船への乗り込みや世界一周といった途方もない提案をしている。さすがにこれは実現しなかった。実は、下山は福澤の愛人であったということが後に確定的に語られている[32]。

こうしたスキャンダラスな風説は当時から流れていたであろう。それが下山にふまじめでふしだらという評価を付け加えていたことは想像に難くない。ただ、「化け込み」が単なるおふざけであったのかどうか、それはまず、連載そのものにあたらなければなるまい。

第 1 回記事（10 月 18 日付）で、下山は取材を「何でも彼でも社会のあらゆる階級を潜って家庭といふ家庭の半面を思ふさま闊（ひろ）くしかも随分と短時日の間に写し見んや」という社命によるものだとしている。実際には後に、フランスの雑誌記事がヒントだったと明かしているのだから、後付けでこしらえた理由に違いない。しかし、そうだとしても、ここには明治末期の新聞が取り組んでいた「人間的興味」による新しい三面記事の形成というテーマに沿う問題意識を見いだすことができる。

小間物行商に化けて最初に訪れたのは、愛知県知事・深野一三の官邸であった。「お齢よりは若々しう召させ玉ふ四十格好の御束髪はこれぞ正（まさし）く知事令夫人と跪って一礼するをツイと横に逸して見帰りもせず」と意地の悪い描写が冴えている。続いて貴族院議員、ミッションスクールの学長、裁判所長など名士の邸宅を訪ね歩く。

弁護士の佐藤清三郎宅を訪れた際、応対に出てきた妻の描写にも容赦がない。

「オヤ此衿留買はうか知ら、三十銭……まあ高価いねえ、お前の宅は何処だい、フン大阪、私かい、私も大阪さ……堂島の女学校に居たんだよ……今の三越の処に呉服屋があったが其処の娘達は私の友達さ……何か珍しいものは無いかねえ、オヤ人形？フン米国のはみな眼が動くよ（中略）アアちつとも欲しい物は無いねえ、勇さん此猫買つて上げやうか」と皰の御曹子に問はせ玉ふ、此奥様妙にフンがお得意と見えたり[33]

白眉は遊郭を訪れた際の描写（10 月 25 日付）だろう。冷やかしに出てきた長唄の師匠に「どうも、ちつとも訳が解らんなも、そんな重い物を背負はんでも芸妓か娼妓でもなったら楽だら

うになも」と説教された下山は、「飛んだ身に余るお言葉」と独りごちながら、宿へ引き揚げる自分のさまを「還御」と形容する。

同じ場面は、『一葉草紙』ではこんなふうに描写されている。

> あの名妓金吾でしられた金波楼へ売りに行つた時なぞ、私の小間物の荷の周囲を取かこんだ新造や大勢の花魁連中が、私をつかまへて口々に「あんたも、そんな事をして重い荷物を負ふて歩くより、かう云ふところで女郎（つと）めた方が楽でお金になりますよ」と云はれたのは、泌々（しみじみ）女の弱さと敢果（はか）なさの心に強い針を打った。生涯／＼忘れられない、冷たい淋しい感じのする言葉でした[34]。

連載は26回まで続き、好評だったようだ。平塚雷鳥と下山京子を比較した大正期の文学評論に、「幸にして彼女は新聞記者としては先づ成功した。彼女を使用した新聞は彼女が執筆した為めに非常に売れ出したと云ふ話があつた」とある[35]。文芸好きのごく平凡な存在だった下山は、体当たりで新しい時代への扉を押し開けたのである。

４.「化け込み」手法の確立と夕刊発行

４−１　『大阪時事新報』の夕刊発行と紙面立ての変化

「中京の家庭」の成功で、『大阪時事新報』の下山に対する期待が一気に膨らんだことは想像に難くない。事実、「婦人記者」の署名が入った訪問記事などがたびたび見られるようになるが、そのほかに目を引くのは、「京子」「きょう子」などの署名でエッセーとも小説ともつかぬ文章が、しばしば、とくに脈絡もなく掲載されるようになったことである。

一例を挙げれば、1908（明治41）年9月27日付で、「京子」の署名で掲載された「無聊」と題する小文がある。内容はとりたてていうほどのこともない。秋風の吹くある日、須磨から汽車に乗り込んできた男女連れを観察し、その家庭生活を想像して物思いにふけるというだけである。まさしく＜私語り＞の世界であり、本来なら文芸作品として扱われるべき内容だが、それが事件事故とならんで掲載されている。よほど原稿が足りなかったのか、あるいは下山の社内的地位が向上したのか。いずれにしても下山の自尊心は大いに満足したことと思われる。

そんな中で、下山は化け込み第2弾となる神戸の高級料亭「常磐花壇」への潜入を試みていくのだが、詳細を見ていく前に、まず当時の『大阪時事新報』が断行した夕刊発行について、背景を整理しておきたい。というのは、神戸への下山の化け込み自体が、この夕刊発行に合わせた特別企画でもあったからである。

新聞事業は①取材体制②印刷工場③輸送手段―の３つが集約されたところに生まれる、とされる。この点で、明治前半からなんどか試みられてきた夕刊発行は、３条件がそろわず失敗を続けた。1877（明治10）年に『東京日日新聞』が2枚の朝刊を1枚ずつ朝夕に分けて配達したことがあり、明治20年代には『郵便報知新聞』『東京朝日新聞』が夕刊を試みたが時期尚早だった[36]。

日露戦後、速報への需要が高まりを見せたのをみはからって夕刊発行に踏み切り、成功させたのは、異能の経営者として知られた『報知新聞』の三木善八だった。そして、成功をみて追

随したのが東京では『中央新聞』『やまと新聞』、大阪では『大阪時事』だった[37]。つまり、大阪における夕刊発行は『大阪時事』が先鞭をつけたものであり、のみならず、大阪では『朝日』『毎日』の二大紙が 1915（大正 4）年に夕刊発行に踏み切るまで、夕刊といえば『大阪時事』とそれに追随した『大阪日日』などにとどまる時期が続いたのである[38]。

ただし、その夕刊は、今日の姿から想像できるものとはかなり違っていた。

発行当初の『大阪時事』は 6 頁建てが標準だったが、すぐに 8 頁に増頁した。夕刊の実態は、この 8 頁を半分にし、4 頁ずつをそれぞれ朝、夕に配達するというもので、制作する頁数は変わらないことがポイントだった。事実、夕刊スタートとなった 1908（明治 41）年 11 月 1 日付の新聞をみると、1–4 面が前日 10 月 31 日夕刻に配達されるというだけで、夕刊という表示はどこにもない。さらに、朝刊たる 5–8 面の新聞には、そもそも 1 面にあるべき題字すらなかった。このため、当初は「夕刊」ではなく「夕版」と呼んでいた[39]。

もっとも、機械的に 8 頁の新聞を半分にするだけでは、商品として成り立たない。トップニュースあるいは硬派記事を掲載する 1 面が 1 日に 2 回必要となることはいうまでもないが、一方でその供給源となる東京の『時事新報』は 1 日 1 回の紙面制作スケジュールに従ってしか送稿してこなかっただろう。「東京電話」と呼ばれた東京本社への電話問い合わせ取材や通信社原稿でなんとかしのぐものの、朝刊のみ発行時は 1 面から 2 面、ときには 3 面までを埋め尽くしていた硬派原稿は、せいぜい朝夕の 1 面を埋めるだけになった。また、一つの新聞に「地元だね」がまったく掲載されていないという事態は避けたい。その結果、朝夕の 2 面（1 日の新聞を全 8 頁とすれば、2 面と 6 面）を、大阪の編集局がニュース面として自力で埋めなければならなくなる状況が起きたのである。

頁数は増えないにしろ、大阪編集局に求められる出稿量は激増した。そこで着目されたのが、前年大きな成功を収めた「化け込み記事」の手法だった。

そう推測できる理由として、一つには、すでに夕刊開始前の段階で、『大阪時事新報』にとって「化け込み」的な連載記事が、下山の個人的な得意技というにとどまらない一般的な手法となっていた事実が挙げられる。1908（明治 41）年 4 月 8 日付に「面白き読み物／仮装記者と俳優」と題する告知記事が載っている。

> 明日の紙上より「楽屋の裏表俳優修業日誌」と題して掲載する記事は記者が仮装して俳優の門弟に入り込み家庭に於ける朝夕の起居動作（たちいふるまい）より白粉臭き楽屋内の状態扨（さて）は楽屋風呂に昨宵の口説の痴話は申すに及ばず夜更けて誰ぞや行燈の影暗き処に跡を尾けて秘事を探り出す抔（など）有ゆる方面より当今の俳優の表面裏面を明白に描写したるものにて一度出づれば梨園界に大恐慌を来たすは必定にて読んで面白き事此上なく

「花水」の署名が入った連載は全 125 回 4 カ月半に及ぶ長大なもので、それが連日当時の「社会面」のトップを飾ったのだから、紙面編集の立場からは大助かりだったに違いない。殺人事件や大災害の発生を予定することはできないが、「ニュースを作る」連載読み物なら、リアルタイムの現場感覚は保持しながらも、紙面繰りの予定も立てられる。

こうした手法が編み出されていく中で、『大阪時事』の夕刊発行は実行に移されたのである。

4－2　化け込み第２弾―常磐花壇

『大阪時事新報』の夕刊発行が始まったのは 1908（明治 41）年 11 月 1 日付であり、実際に初めて夕刊（夕版）が配られたのはその前日の 10 月 31 日夕刻であった。その 2 面（夕刊の 2 頁目）に、「鬼が出るか蛇が出るか記者探偵第一班の活動」と題する記事が掲載された。「浪之助」によるその記事には、「記者探偵」企画が夕刊発行と直結した試みであることが明確に語られている。一部、さきの引用と重複するが、改めて内容をみてみよう。

> 夕版を刊行して大活動を試みんとする我社は同時に我社会部員も大いに忠勤を抽んでて精力主義を実行する事に決議した。そこで部員一同頭を揃えてありつたけの知恵袋を絞った結果、茲に其活動の第一歩として部員数名を以て記者探偵活動隊なるものを組織した。有らゆる社会各方面の裏表を探偵して我が読者に興味ある報告を提供しやうとするのである。その何の為に探偵するか、管々しくもそんな説明を聞かうとするやうな野暮の人は恐らく我読者には有るまいと信ずる、我々もまた隊員の報告が読者をして快哉を叫ばしむるに足れば夫（それ）で満足するのである。探偵の先駆は斯う申す我が輩に籤が当たった。一同の評決は速（すみやか）に探偵を遂げて卅一日の夕版を刊行するまでに必ず好材料を挙げて呉れ給えとある。諾（よ）し承知したと容易に引き受けはしたものの……

難事業である夕刊発行のために、「化け込み」「探偵」の手法を導入したというのであるが、大義が見つからずに開き直っている節もある。理屈などどうでもいいと開き直るのも手ではあろうが、『大阪時事新報』は曲がりなりにも『時事新報』の「分身同体」を標榜する高級紙である。このジレンマは看過できない重みを持っていたのではないか。

加えて、「化け込み」「探偵」手法は、だれにでもできる簡単な取材方法というわけでもなかった。事実、共益社という小さな探偵事務所に潜り込んだ「浪之助」はたいしておもしろいストーリーを作り出すことができず、早々に連載を切り上げて「馴れぬ初陣の勤めとて思つた程の手柄もなかつた」「読者の厭倦を招いた事と存じ」「第一班の失敗は第二班で埋め合わせを請ふ、さらば／＼」と自嘲しつつ退散してしまう[40]。

そこへ、満を持して登場したのが、下山による「常磐花壇」連載である。「お君さん」を名乗って神戸の高級料亭に仲居として住み込んだ下山は、及び腰の「浪之助」と違って、堂々と現場の人間模様に入り込んでいく。

> 私は不図（ふと）暗黒の方面に身を落として其の悲惨な境涯にある婦人の消息を探つてみやうという考を起こした。然し夫（それ）は破天荒な暗い世界に身を潜めて益も無い闇の醜事を世に暴露しやうと云ふのではなく、聞くだに忌まわしい罪の世界に身を堕落させるまでの果敢（はか）ない人の経路や憂事多き日蔭の生活を現（あり）の儘に描写（うつしだ）して一時の迷に自分から凄じい濁江（にごりえ）の渦中に溺るゝやうな不幸な人の少なかれと思ふの他はない[41]。

ここで、下山は権力の横暴でもなく、また社会の最下層の闇でもなく、ただ日常に潜む「は

かなさ」や「憂事」を切り取るという方法論を呈示している。何のためにとあえて問われれば、「不幸な人の一人でも少ないことを願って」と答えるほかはないが、実際は「化け込み」の機能としてそのような効用が措定されているわけでもない。

「暴露」はスキャンダリズムの大きな要素だが、とりたてて社会正義の実現を気負っているわけではない。むしろ、下山の基調は底辺に暮らす者たちへの温かいまなざしにある。初めて店に上がったその朝、眠り込んでいる２人の奉公人の少女を目撃する。

> 偶と見ると其入口に鴨脚返(いてふかへ)しの若い女が二人、枕の方角を互違いにして、更紗木綿の夜具にくるまつたのが心地やうすや／＼と寝入り込んでゐる。（中略）針箱や化粧道具のおいてある棚の前には、さも娘らしい紅裏の派手な木綿着物が二三枚振下がつて居る。斯うした境遇は世間に類の無い事でもないが、現在目前に斯んな生活を見ると、ツイ泣虫の本性が出て耐らなくなる。私は一足飛びに四十位の優しいお母さんになり、自分達が受けた蜜のやうな慈愛の滴を此冷たい境遇の娘さん達に注いで見たいと思つた。[42]

そもそも、男性と同等とはみなされていない当時の女性記者の立場を考えると、下山に社会正義への視線や厳しい世相批判を求めることは無い物ねだりに等しく、またそれは下山にしたところで思ってもみないことだったにちがいない。代わりに記事から読み取れるのは、恵まれない者への共感である。それは、下山がどこまで意識していたかは別として、女性記者としての特質であり、また、それは紙面的を埋めるための要請から活躍の場を女性に与えた結果、図らずも紙面に刻印された一つの特徴であった。

反響は上々だった。下山自身が当時を振り返り、

> 私が神戸の花壇を帰つてから、あつちの花柳界では、誰いふとなくこんな流行唄が座敷に流行して、私が褄を端折つて逃出しゆく真似をする振まで附いたさうでした。「お君さん、好きで仲居をするのぢやないが、新聞材料のしかたなし、僅か三日のね、苦労して、後は野となれ山となれ」

と話題となったと述べている[43]。昭和初期に出版された『明治八人女』は、「内容は兎に角として当時にあつては婦人記者として類の無い活動振りであつた」としている[44]。

下山のその後を簡単にみておこう。正確な日付は不明だが、「常磐花壇」への化け込みの後、まもなく東京の『時事新報』に異動になった。辣腕が評価されたのか、あるいは社長の愛人という風説が正しいとすれば、そのために呼び寄せられたのか、真相はわからない。

ただ、生まれ故郷でもある華やかな首都に凱旋した下山の記者生活は、大阪のように充実したものではなかったようだ。「流行を書いたり、いろ／＼婦人美に関することでも調べたり（中略）大阪時代とは全(まる)で反対の閑散(ひま)な手持無沙汰な記者生活」であった[45]。『時事新報』と『大阪時事新報』は合同で毎年正月の紙面に社員名簿を掲載するが、1913（大正 2）年の正月紙面からは下山の名前は消えた。

その後、築地に「一葉茶屋」なる料理屋を出し女将に納まったが長続きせず、今度は女優に

転身し、「サロメ」を演じるなどした。しかし、一時の話題以上に評価されることはなく、1916（大正 5）年ごろを境に消息は途絶えた。新劇の父と称される劇作家、小山内薫は下山について、声が大きいという印象以外には何もないと酷評している[46]。

夕刊も、期待したような効果は発揮できなかった。『報知』の成功はあったものの、夕刊発行は依然当時の新聞にとって難題だった。夕刊発行に踏み切った『大阪時事新報』はこれまでの失敗例と同様、原稿不足と配達の困難に悩まされた。夕刊開始後からしばしば、『大阪時事』の紙面には「せっかくの夕刊を配らない不届きな配達人がいる」「新聞の乗り換えを進める売捌店がある」などとの警告が頻出するようになり、1909（明治 42）年には大阪市内の販売を一手に取り扱っていた「大時舎」との契約解除が告知されている[47]。理由の詳細は不明だが、背景に販売に対する朝毎の厳しい締め付けをみることは不自然ではないだろう。

下山の活躍にしろ、関西の先陣を切った夕刊発行にしろ、一時の話題は呼んだものの、長期的には成果を上げるまで至らずに忘れ去られていったのである。

５．おわりに

ここまで、化け込み記者の異名をとりつつ健筆をふるった下山京子の記事を中心として、明治末期の『大阪時事新報』にみられた新しいニュースのかたちについて考察してきた。この時期、『大阪時事』だけでなく、新聞界全体が大きな変革期にあった。比較材料として同時期の新聞の状況を精査することは残された課題であるが、本稿ではとりあえず、当時はかなりの話題を呼びながら忘れ去られてしまっていた下山の記事を再検討することで、『大阪時事』をめぐる構造のなかでメディアの変容に果たした下山の役割を再評価することができたと考える。下山は、ニュースが東京ほど豊富ではない状況下で、「ニュースを作る」とでもいうべき手法の誕生に関与したのであった。

下山は異動後の東京での記者生活に幻滅し『時事』を去るのだが、なぜ大阪での記者生活は充実していて、東京での記者生活は手持ちぶさただったのだろうか。当時、女性記者の立場や評価は男性とは対等にはほど遠く、そもそも書くことのできる記事の種類そのものが非常に限られたものであった。そんな中で、『朝日』『毎日』の壁の前に苦戦し、内容充実のための増頁や地元でのさらなる記事調達の圧力にさられていた『大阪時事新報』は、女性記者下山に活躍のチャンスを与え、予期せぬ結果として当時の常識を破った新しいニュースのかたちを生み出すことにもつながった。そうした革新は、はるかに充実したインフラ、資力、人材をもっているはずの東京の『時事新報』ではなく、大阪でこそ実現したのである。

『大阪時事新報』に集った記者たちは、「記者探偵」「化け込み記者」の手法やアイデアを使って生き残り競争に立ち向かい、予期せぬ結果として従来の硬派、軟派のフレームにとらわれない新しいジャーナリズムの創造に立ち会ったともいえる。ただしその歩みは、決してジャーナリズム史に燦然と輝くような、あるいは現代的視点からみても称賛されるようなものではなく、同世代の批判によっても簡単に論破されてしまう、危うく、はかない所為であった。

下山に向けられた同時代の批判とは、たとえば次のようなものである。草創期の女性記者の一人、磯村春子は、かつて編集長から化け込みの手伝いを指示されたことがあると明かした上で、「罪の無い家庭の穴探しじみた事をしたり、或は偽名変装して、みだりに平和な家庭の内幕

をあばくといふ様な事は、一時は読者の興味を惹き起こす材料になるとはいへ、それが高尚なる記者の仕事として称揚すべき事でありませうか」と反駁して断ったと書き残している[48]。磯村のように自己を客観視する視点を下山は持たなかった。

大阪で「化け込み」は成功したが、明確な戦略と準備によるものでなかったことは明らかである。事実、『大阪時事』はその後、ジリ貧に陥っていく。といって、東京の『時事新報』に下山を生かすだけの柔軟さはなかった。ニュースが溢れ、それを追いかけるだけで十分の東京では、そしてとりわけ『時事新報』のような高級紙のスタイルが確立していた新聞においては、下山が大阪で切り開いた手法は必要とされなかった。

一方で、「ニュースを作る」スタイルは、それを許容するだけの社会的な広がりと奥行きがなければ不可能である。よって、大都市圏以外の地方では成立が難しい手法といえるだろう。そもそも小新聞そのものが大都市圏に特有の産物であった[49]。とすれば、下山京子らが切り開いた「化け込み」をはじめとする「ニュースを作る」記事のかたちは、首都でも地方でもない大阪という場に特有な性質を持ったジャーナリズムのひとつの萌芽を示しているといえるだろう。

（引用部分は新旧にかかわらず仮名遣いは原文通りとしたが、漢字については原則常用字体に改め、読みやすいように適宜句読点、ルビ等をおぎなった）

注

[1] 江刺昭子『女のくせに―草分けの女性新聞記者たち』インパクト出版、1997 年、219 頁。
[2] 山本武利によると、明治 30 年代の『報知』は三面記事に力を入れ、探偵部と称する担当係を社内に設置していた。しかしその実態は、花柳界をフィールドとする従来の「艶種」から警察種への移行を主眼としたもので、本稿で取り上げるような「化け込み」などのルポを意味するものではかならずしもない（山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、1981 年、105 頁）。
[3] 『大阪時事新報』1908 年 11 月 1 日付
[4] 内川芳美「近代新聞史研究方法論序説」『東京大学新聞研究所紀要』3 号、1954 年 3 月、64 頁
[5] 土屋礼子『大衆紙の源流―明治期小新聞の研究』世界思想社、2002 年、26 頁
[6] 江刺、前掲書、27−29 頁
[7] 春原昭彦「新聞史にみる女性たち」春原ほか編『女性記者―新聞に生きた女たち』世界思想社、1994 年、10−11 頁
[8] 江刺、前掲書、41−44 頁
[9] 春原編、前掲書、13−14 頁
[10] 春原編、前掲書、15 頁
[11] 中平文子『女のくせに』やなぎや書房、1916 年、20 頁
[12] 松崎天民『恋と名と金と』弘学館書店、1915 年、192 頁
[13] 江刺、前掲書、219 頁
[14] 小林裕子「告白体というスタイル―小説」新・フェミニズム批評の会編『『青鞜』を読む』學藝書林、1998 年、48−50 頁
[15] 小林裕子「解説」『女性のみた近代　下山京子『紅燈の下』』ゆまに書房、2000 年、358 頁
[16] 北田幸恵「女の＜私語り＞」岩淵宏子ほか編『フェミニズム批評への招待―近代女性文学を読む』學藝書林、1995 年、14 頁

[17] 山本武利『新聞と民衆―日本型新聞の形成過程』紀伊國屋書店、1973 年、35−36 頁
[18] 津金澤聡廣『現代日本メディア史の研究』ミネルヴァ書房、1998 年、47−69 頁
[19] 平田由美「《議論する公衆》の登場」成田龍一編『岩波講座近代日本の文化史３近代知の成立』岩波書店、2002 年、199−231 頁
[20] 有山輝雄『近代日本ジャーナリズムの構造―大阪朝日新聞白虹事件前後』東京出版、1995 年、141 頁
[21] 土屋、前掲書、227 頁
[22] 西澤雲浦「三面記事の改良を促す」『中央公論』19 巻 1 号、反省社、1904 年 2 月、88−90 頁
[23] 野逸道人「三面記事の改良」『中央公論』23 巻 9 号、反省社、1908 年 9 月、148−149 頁
[24] 「新聞の三面記事に対する主義方針」『新公論』24 巻 8 号、新公論社、1909 年 8 月、16−17 頁
[25] 下山の自伝的小説である『一葉草紙』によると 1891 年の生まれとなっているが、それだと 16 歳の時に『大阪時事新報』に入社したことになり辻褄が合わない。ただし、ほかに事実関係を確認できる資料が存在しないため、ここでは便宜的に生年を 1891 年としておく。
[26] Ｘ生『新しき女』聚精堂、1913 年、90 頁
[27] 下山京子『一葉草紙』玄黄社、1914 年、135−136 頁
[28] 前掲書、139−140 頁
[29] 1905 年 3 月 14 日付『時事新報』は、『大阪時事』発刊の社告として「大阪時事新報は時事新報と分身同体なり。故に方針主張において毫も異る処なし」と述べている。
[30] 朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史明治編』朝日新聞社、1990 年、573 頁
[31] 下山、前掲書、143 頁
[32] 「野依社長にものを訊く会」『実業之世界』34 巻 5 号、実業之世界社、1937 年 5 月、198 頁
[33] 『大阪時事新報』1907 年 10 月 24 日付
[34] 下山、前掲書、144−145 頁
[35] 葦上修「平塚雷鳥と下山京子」『新小説』19 巻 5 号、春陽堂、1914 年 5 月、55 頁
[36] 山本文雄「日本新聞界における朝夕刊制の発展について」『新聞学評論』第 11 号、日本新聞学会、1961 年 10 月、106−117 頁
[37] 伊藤正徳『新聞五十年史』鱒書房、1943 年、212−213 頁
[38] 山本武利、前掲書、281 頁
[39] 朝刊に題字が入るようになるのは翌 1909 年 4 月からで、夕刊（1 面）欄外に「夕刊」「夕版四面明朝発行の朝刊と合せて八面」「午後五時発行」などと表示されるようになった。
[40] 『大阪時事新報』1908 年 11 月 14 日付夕刊
[41] 『大阪時事新報』1908 年 11 月 19 日付夕刊
[42] 『大阪時事新報』1908 年 11 月 24 日付夕刊
[43] 下山、前掲書、147 頁
[44] 千田理示造『明治八人女』森田書房、1936 年、31 頁
[45] 下山、前掲書、169 頁
[46] 田中栄三『新劇その昔』文藝春秋新社、1957 年、177 頁
[47] 『大阪時事新報』1909 年 12 月 18 日付。以後購読者は大阪時事新報社販売部ならびにその出張所に連絡するよう呼びかけている。
[48] 磯村春子「女記者修業」『女の世界』1 巻 9 号、実業之世界社、1915 年 12 月、57 頁
[49] 津金澤、前掲書、49 頁

（教育文化学コース　博士後期課程 2 回生）
（受稿 2019 年 8 月 30 日、改稿 2019 年 11 月 11 日、受理 2019 年 12 月 13 日）

「化け込み記者」下山京子再考

―初期『大阪時事新報』の紙面から―

松尾　理也

明治末期、高級紙『時事新報』の西における分身として創刊された『大阪時事新報』に入社した下山京子は、「化け込み」と呼ばれる変装潜入ルポを得意とした異能の記者であった。下山は自堕落な人物だったと考えられているが、女性記者の役割が限定されていた時代に、その枠を超える活躍をしたジャーナリストでもあった。夕刊発行のため自前の原稿調達の必要に直面した『大阪時事』で、下山は神戸の高級料亭「常磐花壇」への潜入など新しいニュースのかたちの開発に成功する。それは、首都に比べればニュースが豊富でない大阪でなんとか紙面を埋めるための「ニュースを作る」手法の誕生であり、同時にそれは、かならずしも社会正義の実現や権力の批判にこだわることなく、むしろ底辺への温かい共感に彩られた記事の出現でもあった。しかし、吹き荒れた三面記事批判の前に『大阪時事』は萎縮し、東京に異動した下山も大阪時代の輝きを失ってしまった。

Rethinking Kyoko Shimoyama, the Reporter in Disguise: From the Articles of Early Osaka Jiji Shimpo

MATSUO, Michiya

Kyoko Shimoyama was a female reporter who joined “Osaka Jiji Shimpo,” which was launched as the representative of the high-class newspaper “Jiji Shimpo” in Western Japan at the end of the Meiji Era. She was good at the style of disguise and infiltration reporting. Shimoyama was regarded as a reprobate, but at the same time she was a woman who went beyond the limits of the fixed idea of how women should be. Faced with the need to procure their own manuscripts for the evening edition, Osaka Jiji adopted a series of stories such as the infiltration of Kobe’s luxury restaurant “Tokiwa Kadan” by Shimoyama and succeeded in developing the new style of news story. It was an approach that helped Osaka Jiji complete its own pages in Osaka, where news was not necessarily abundant. The new style was also characterized by its compassion toward people at the bottom of the socioeconomic hierarchy, without being particular about realizing social justice. However, facing criticism for sensational journalism, Osaka Jiji was compromised, and Shimoyama, who was transferred to Tokyo, lost her brilliance in the Osaka period.

キーワード：　下山京子、大阪時事新報、新聞史、関西ジャーナリズム
Keywords: Kyoko Shimoyama, Osaka Jiji Shimpo, History of Newspaper, Kansai Journalism